

論 文

新島襄と共立普通学校 創設者・井上浦造

大崎 厚志(聖学院大学大学院 政治政策学研究科 修士課程)

1. はじめに

井上浦造(1867～1952)は、上野国勢多郡(現群馬県前橋市)に生まれた。出身は赤城山南麓の農家であるが、学問に興味をもち、前橋で海老名弾正を知り、のちに前橋教会にて、「熊本バンド」出身の不破唯次郎より受洗し、キリスト教に入信する⁽¹⁾。明治21(1888)年に、伊香保に静養にきていた新島襄と出会い、その人物を慕い、京都の同志社に学ぶことになる。卒業後は群馬県にもどり、主に沼田・前橋・館林などで伝道するが、やがて「教育」に関心を持ち、伝道生活をやめ東京へ出る。東京では教育界に転じるべく独学し、群馬県へ帰郷。ついに群馬県大間々町(現群馬県みどり市)に念願の「共立普通学校」という(私立)中等教育機関を設立する。以後、井上浦造は、校長として廃校までの約四十年間、地方教育にたずさわる。

「共立普通学校」は、明治33(1900)年に井上浦造によって創設された当時の中等教育程度の学校であった。「共立普通」の文字には、井上浦造が新島襄の同志社に学び体得した「デモクラシー」の理想が込められていたという⁽²⁾。その経営方式は、当時の大間々地域の町村長たちに働きかけて資金を集めた。その後、「共立普通学校」は、昭和13(1928)年に廃校(町立に移管)後、幾多の変遷を経て、現在では、群馬県立大間々高等学校として存続している。また、「共立普通学校」の教育の特色として、一時期ではあったにせよ、住谷天来⁽³⁾といった個性豊かな人物を招き、教鞭をとっていた点がある。

ところで、井上浦造は、群馬県においても、まだ、その存在があまり知られていないが、かれは、

同志社時代の恩師新島襄をはじめ、柏木義円、住谷天来、松村介石といった近代日本の代表的宗教家たちと交流があった。浦造は若き日、内村鑑三の『後世への最大遺物』の講演を聴き感銘を受け、「教育」の道に己の志を定め、その生涯を捧げた。柏木義円⁽⁴⁾は『上毛教界月報』紙上で、教育者としての井上浦造を高く評価している。

かれについてのこれまでの研究は、簡単な経歴の紹介として、『日本キリスト教歴史大事典』(教文館)、『群馬県教育史・別巻・人物編』(群馬県教育委員会)などがある。また、萩原俊彦著『近代日本のキリスト者研究』⁽⁵⁾には、「大間々普通学校を創立した井上浦造」としてまとまった論稿が所収されている。

井上浦造には、『後凋先生詩文集』という著書があり、このなかに「自叙傳」⁽⁶⁾が所収されている。この著書を読み解明することによって、かれの生涯、思想形成を知ることができる。「共立普通学校」については、『大間々高校百年史』(群馬県立大間々高等学校編)を資料として活用する。本稿では、新島襄との関係、柏木義円、住谷天来ら近代日本におけるキリスト者たちとの交遊関係などを明らかにして、井上浦造の人となり进行を考察する。

2. 新島襄との出会い

明治時代初期の群馬県地方は、新島襄(1843～1890)の出身地である安中をはじめ、全国的なかでもキリスト教の信徒数の多い地域であり、同志社に学んだ新島の弟子たちの布教が活発な地域⁽⁷⁾であった。赤城山南麓地域にもキリスト教が浸透しつつあり、浦造が、前橋に出た明治17(1884)年頃、当時の前橋教会において海老名弾正⁽⁸⁾を知

論 文

った。浦造は、海老名との出会い後、後任として前橋教会にきた不破唯次郎牧師より、明治20(1887)年2月6日、洗礼を受けた⁽⁹⁾。不破唯次郎は、「熊本バンド」の一員であり、同志社の第1回卒業生でもあった。浦造は、赤城山南麓の村から前橋の町に出て、「幽谷義塾」という私塾に入塾する。明治20(1887)年のことであった。幽谷義塾は、漢学・英学・数学などを教える私塾⁽¹⁰⁾であった。この幽谷義塾時代に、のちに生涯交友を結ぶ住谷弥作(天来)と出会う。住谷も、農家の出身であったが、学問を好み幽谷義塾に入塾した⁽¹¹⁾。住谷は、『聖化』(第20号)⁽¹²⁾において、「後凋先生は本名を井上浦造君といい、予の青春時代の友なり」と記している。住谷も、明治21(1888)年3月4日、不破牧師から洗礼を受けた⁽¹³⁾。

浦造は、前橋教会の神学生の一人として同志社行きを決心し、遊学することとなった。当時、同教会からは、佐竹篤・井上浦造ら五人が神学生として送りだされ、佐竹・井上ら4名が同志社へ。1名は、神戸女子伝道学校へ入学した⁽¹⁴⁾。佐竹篤はかつて勢多郡鼻毛石村(現群馬県前橋市鼻毛石町)の小学校教員で、浦造とは旧知の間柄であり、浦造より先に同志社へ進学していた。明治21(1888)年8月、同志社の学生佐竹が夏期伝道師として、大胡・大間々地方に派遣されていた。その佐竹の話に、新島襄先生が、伊香保に療養にきているというので、一緒に見舞いに行くことになった。新島は、明治21年7月24日、前橋に到着している⁽¹⁵⁾。7月27日、前橋を出発し、静養のため伊香保の木暮武太夫方に到着しており、8月6日には、千明氏の別荘に移っていた。浦造の記憶によると、

「八月の何日であつたか記憶はして居らぬが、新島先生が伊香保に病を養はれてるといふので、佐竹氏が見舞に行くから、同道せよといふので、月田學校の高島房次郎君と余と三人で馬車で伊香保に行いて、先生に面會した。

伊香保は千木良氏の別邸で先生は鼠色のフネルの和服で居られた」(「自叙傳」34頁)

と述懐している。高島房次郎は、浦造の実家に近い小学校教員であり、すでに前橋教会において洗

礼を受けていた。浦造は新島の姿について、

「上州の地図を開いて佐竹氏に見せて此所にも手をつけねばならない、と伝道の事を話されたのであったが、段々と熱心になって来ると、その御令聞が、もしそのお話はやめにさせていただかないかとおからだに障りましよう」と仰せられる。先生は笑いながらやめられた」(「自叙傳」34頁)

と回想している。なお、新島の当時の記録⁽¹⁶⁾が残されており、明治21年8月16日には、八重夫人が伊香保に来ていたので、浦造ら三人が新島と面会したのは、八重夫人の到着後かと推定される。しかし、新島の日記には、浦造ら三人が来訪したという記述は見られない。この時が、浦造と新島襄の初めての対面となった。浦造は新島についての印象を、

「この時余は新島先生という人はもっと年をとった人であると想像していた。余りにお若く、そしてお顔の色もすぐれず、さりながら温乎たる風貌中、凜乎として狙るべからざる威厳があった。という様に感ぜられた」(「自叙傳」34頁)

と新島の当時の姿について記している。

だが、新島の記録によると、明治21(1888)年9月16日、前橋桑町住吉屋に宿泊しており、その宿舎を浦造らが訪ねている記述がある。この時は、「井上浦造、高津仲次郎、竹内鼎三、宮口二郎、中島祐八」ら十名が訪れていた⁽¹⁷⁾。彼等の多くはキリスト教信者であり、この時は主に組合教会と一致教会の合併のことについて意見を交わしたという。なお、この時の出来事については、浦造の自叙伝には記載がない。浦造と一緒に新島を訪問した高津仲次郎は、早くから自由民権思想をもち、「上毛青年会」の創設にも関係し、県会議長や衆議院議員となった。同じく竹内鼎三、宮口二郎、中島祐八らものちに衆議院議員となり、群馬県地方の政治家として活躍した⁽¹⁸⁾。

3. 同志社神学校時代

浦造は幽谷義塾を退塾して、明治21(1888)年

9月、22歳の時、夏期休業で帰省していた同志社の学生佐竹篤と一緒に同志社へ向かった。こうして、同志社神学校別課神学科の一年生ということになり、ここに浦造の同志社神学校時代が始まった。別課神学科とは、「基督教ノ教師ヲ養成スル為メ邦語ヲ以テ神学ヲ授ク」という学科⁽¹⁹⁾であった。同志社側の明治22(1889)年1月の資料によると、かれの名前が「生徒族籍氏名一覧」の「イ之部」に「群馬県南勢多郡馬場村 平民 別科神学一年生 井上浦蔵(造)」として掲載⁽²⁰⁾されている。

また、浦造が入学した頃の同志社(当時)に学んでいた群馬県関係者の先輩としては、「柏木義円(五年生)、磯貝由太郎(雲峰)(五年生)、佐竹篤(三年生)、深井英五(三年生)」らが学んでいた⁽²¹⁾。なお、柏木義円とは、晩年に至るまで交流をもった。磯貝由太郎(雲峰)は卒業後、同志社女学校教員となり、『同志社文学』の編集にたずさわって文学者として活躍⁽²²⁾。深井英五は、高崎出身。西群馬教会の星野光多を知りキリスト教に入信。戦前の第13代日本銀行総裁にまでなった人物である⁽²³⁾。

浦造は、同志社の寮に入って学生生活を始めた。かれが当時習った科目と教師についてであるが、聖書の解説と教会の歴史は、ラーネット博士。組織神学及旧約書は、デヴィス博士。ゴルドン博士より牧会学、森田久万人より心理学と倫理学などを学ぶ。英語は、中島末治らに学び、課外として湯浅吉郎博士より、ヘブライ語を習った。

新島は同志社を大学に昇格させるべく、大学設立募金活動のため、明治22(1889)年11月下旬より前橋⁽²⁴⁾を訪れていたが、体調を崩し、その後、療養のため大磯へ。しかし、体調は回復せず、明治23(1890)年1月23日死去。浦造にとっては、終生、尊敬する恩師であった。新島の死後、十数年後、『山田郡教育會雑誌』(第60号)[明治36年10月24日発行]⁽²⁵⁾で、新島について次のように述べている。

「(前略) 余輩先生在世の日同志社の門にあり時々其演説を聴き且つ其温容に接したれば其人格に就て確認する所なきにあらず又其当時先輩より伝聞せる所のものも少なからず…」

として、恩師の在りし日、その演説姿などを近くに見上げていた。また、浦造はある夜、新島邸を訪ねた様子を次のように述懐している。

「余は一夜先生を訪ひ將に辞せんとす先生から燭を採りて之を玄関迄送り来りたりと然り燭を採りて人を送る寧ろ平凡なる行為にあらずや而如此人を感動せしめし所以のもの何ぞや曰く人たるもの故を以て真心より敬愛したればなり…何人も其徳に服せざるものなかりき」(『山田郡教育會雑誌』第60号)。

わざわざ新島が、浦造を見送るさいに、「燭(ランプ)」を持って玄関まで見送ってくれたという話だが、同志社の創立十周年記念式典が、明治18(1885)年にあり、新島がその演説の中で「諸君よ、人ひとりハ大切なり。一人は大切なり」との言葉⁽²⁶⁾を語っていることから、まさに新島の浦造にたいする扱いも、その言葉を裏付ける。

こうして、明治25(1892)年6月24日、同志社神学校別課神学科を卒業することとなった。『基督教新聞』(明治25年7月1日、第466号)⁽²⁷⁾の「教報」、「京都同志社卒業式の詳報」には、

「京都同志社各学校卒業式(京都通信) 普通学校並に神学校第十七回卒業式は六月二十四日午後二時より開会湯浅治郎氏会を司り…高橋鷹蔵氏の演説…小崎校長證書を授与し式終り…」

と卒業式当日の様子を伝えている。なお、同新聞の「神学校別科卒業生」名簿によると、「石原甚三郎(岡山県)、井上浦造(群馬県)、岡部太郎(長野県)、高橋鷹蔵(新潟県)、武田佐吉郎(福岡県)、野口末彦(熊本県)…」の合計17名とともに、浦造は同志社神学校を卒業した。また、同級生のうち、岡部太郎、石原甚三郎、武田佐吉郎、野口末彦らは、卒業後も浦造と交流があり、のちに上州の教会とも関係をもった人たちであった。岡部太郎⁽²⁸⁾は、群馬県内の高崎、甘楽教会牧師として活躍。岡部は一時期、柏木義円の下で、『上毛教界月報』の発行にたずさわった。石原甚三郎⁽²⁹⁾は、浦造の伝道先近くの吾妻郡高山村尻高への伝道に従事。武田佐吉郎⁽³⁰⁾は、浦造とほぼ同時期に、西群馬(高崎)教会伝道師となり行動をとともにし

論文

ている。野口末彦⁽³¹⁾は、のちに前橋教会牧師としても活躍。

4. キリスト教伝道師時代

さて、同志社卒業後、浦造は、郷里、上州の須川（現群馬県利根郡みなかみ町須川）へ行くことになった。群馬県の北毛地域は、山間部で交通の不便な地域であり、この地域の伝道に賭ける浦造の意気込みには、なみなみならぬものがあつた。当時のことを振り返り、

「…新島先生の素志を継ぐはそれである。彼の愛国的熱誠、彼の純真な、『ピュリタン』的信仰、これこそ日本を救うべき唯一の途であると信じたのである」（『自叙傳』53頁）

と述べている。新島襄直門下として同志社に学び、キリスト教伝道師（組合教会）として任地におもむく熱き情熱が感じられる。なお、「須川基督教会年表」⁽³²⁾によると、明治25（1892）年の記録に「井上浦造一時中止シアリシ須川伝道ヲ再開ス」との記述が見られる。しかし、実際には伝道活動は思わしくなく、当時のきびしい伝道生活を回想している。結局、「須川に寓する事一年と二ヶ月何等の功績もなく徒に慷慨悲憤のみして、沼田に転ずる事になった」（『自叙傳』55頁）という。

明治26（1893）年、沼田町（現群馬県沼田市）に到着。『沼田教会百年の歩み』の記録⁽³³⁾によると、「明治二十五年四月より井上浦造氏伝道師として来任。始めは須川に居を定め、当地へ毎月二回宛出張せられしが二十六年五月より当地に転居し、専ら当地を伝道せり。此時より沼田小学校前に一家を借り受け再び沼田基督教講義所を開設す」

との記述が見られる。沼田へ移転した頃の心境について、浦造は、

「我国を救うは、何としても英国の清教徒のような、頑固な、敬虔な団体を要する、将来の沼田に、社界を動かすべき一大勢力ある教会を造らなければならない。これこそ、余が使命である」（『自叙傳』57頁）

と伝道に賭ける思いを述懐している。なお、「組

合教会二十六年度一覧表」によると西群馬教会の教勢として、講義所「高崎町、倉ヶ野、沼田、須川」とされ、牧師及主任伝道師に「武田佐吉郎」、伝道師に「井上浦造」と記載⁽³⁴⁾されている。しかし、伝道師生活に満足していなかった浦造に、

「汝はかかる事をして居っては何時になっても、神の為に、有益な、働きは出来ない。何ぞ教育界に立ちて、その間に伝道してはどうか。…教育という時間的の仕事に衣食して、その間に伝道は出来るではないか。直接に道を説くのみが神への奉仕ではない」（『自叙傳』59頁）

と、「神の声」があつたという。須川・沼田と伝道生活を続けていたが、しだいに「教育」に関心を向けた。この沼田で、松村介石に出会う。その後、浦造は、松村と長らく交友があつたらしく、『華甲記念 後凋先生詩文集』には、松村が序文を寄せているほどである。後年、浦造は基督教伝道師を辞め、教育界に転じるが、思想的にも松村の独特な宗教観⁽³⁵⁾へと惹かれ、接近していくのである。

明治27（1894）年7月、箱根において第6回基督教青年会夏期学校が開催された。浦造はこれに参加し、内村鑑三らの講演⁽³⁶⁾を聞いている。浦造はその時の講演について、

「…もう一は内村鑑三先生の後世の最大遺物という講演であつた。…その時に深く深く余に感動を与へた。余も何か、後世の為に遺したい。最大遺物！自分の力相應の遺物、これを残したい。…」（『自叙傳』61頁）

と記している。とくに「深く深く余に感動を与へた」との言葉は、当時、伝道生活に苦しんでいた浦造にとって、内村の講演がよほど心に響いたと思われる。

浦造は、明治27（1894）年12月、沼田を去ることになり、前橋教会・杉田潮牧師を助けることとなった。「須川基督教会年表」の明治28（1895）年1月の記録にも、「井上浦造前橋教会へ転任」と記載されている。杉田潮⁽³⁷⁾は、やはり同志社で新島襄に学んだ浦造の先輩であつた。ただ、前橋教会側の記録⁽³⁸⁾としては、杉田の記録のみしかなく、浦造の記録は不明である。

ところで、浦造は、前橋で結婚して新たな生活を始めることになった。妻の藤子は、熊本県士族の娘で、辻密太郎より洗礼を受け、神戸女子神学校に学び、同校の第1回卒業生⁽³⁹⁾となった才女であった。しかし、ほどなく浦造は、これまでの自己の伝道生活を心機一転させるべく、組合教会としては伝道した事のない館林を希望した。こうして、館林での伝道に従事。「須川基督教会年表」によると、明治28(1895)年8月に、「前橋教会伝道師井上浦造館林講義所伝道師ニ着任」との記録がある。ただ、館林においては、とくに「新神学」の信仰上の問題について苦悩していた。「新神学」は、海老名弾正・小崎弘道・金森通倫など組合教会系の人々に影響を与えたといわれているが⁽⁴⁰⁾、浦造は、諸先輩や友人にも相談したらしく、「…是は自分と神との問題である。遂に伝道に衣食する事は断然としてやめると決心した。それぞれこの事を部会に届け出て、その諒解を得た」(「自叙傳」70頁)との結論をだし、伝道生活に別れを告げた。その後、浦造は教育界に転じるべく、明治30(1897)年に東京へ出た。約2年間、下宿屋を開業しながら独学し、学校を設立すべく準備を進めた。そして、明治32(1899)年に故郷・上州へもどった。

5. 教育者として

— 共立普通学校の創設 —

明治32(1899)年8月17日、井上浦造は、群馬県山田郡大間々町桐原(現みどり市大間々町桐原)にある本要寺の境内に、一軒の空き家を借りて、数名の青年に「英語」を教えながら学校を設立させるべく、心当たりのある人物を訪ね、自己の教育観を語り、共鳴者を求めた⁽⁴¹⁾。

浦造は、たんなる個人の私塾的性格の教育機関でなく、公教育(当時の中学校などの機関)にたいして、自己の理想(教育機関のない農村部の子弟が通える中等教育機関の設立)を実現させるための学校設立を考えていた。しかし、設立の費用の問題もあるので、地域の有力者である地方政治家などに協力を求めた。ようやく大間々地域で、

浦造の考え方に共鳴する人びとが現れて、明治33(1900)年に「山田郡(大間々町・川内村・相生村)勢多郡(新里村・粕川村・黒保根村・東村)、新田郡(笠懸村)」の一町八ヶ村の有志に組織と学則などを載せた「共立普通中学校設立趣意書」という印刷物を配布。ここでは、「共立普通中学校設立趣意書」⁽⁴²⁾の一部を抜粋する。

「世界文化の潮流一度我邦に注ぐや、宛然大江の決するが如く滔々洋々茲に三十余年駸々たる国運、将に欧米を凌がんとするの概あり、又偉ならずや、…堂々たる艦隊、蜿々たる鐵路日く政治日く殖産是皆文明の外形にして其实質にあらず。其实質たるや実に国民夫れ自身にありて存す…」(『大間々高校百年史』563頁)。

すなわち、ここに浦造の歴史観や教育観が見られる。明治維新からすでに約三十年がたち、「文明開化」の方針も西洋文明の導入にともない進展してきた。また、対外的にも日清戦争に勝利し、近代日本が欧米列強と並び帝国主義国家の仲間入りをする突破口を見いだした時代であった。そこで、浦造はいかに軍備を整え、「富国強兵」の成果をあげても、それは「文明の外形」にしか過ぎないととらえ、次のように述べている。

「苟も其の国民にして雄大高潔健全たらんか。毅然として列強の間に闊歩する事を得べきのみ。夫れ何を以て国民夫れ自身の實力を養はんか。今や十九世紀最後の年を迎へたり。夫れ何を以てか二十世紀の活劇場裏に馳聘するの人材を養成せんか。教育の根本的事業たる、識者を俟つて後知らざるなり…」(「自叙傳」94頁)。

したがって、真に日本国家に必要なことは、未来に活躍できる人材の育成であり、「文明の本質」に関わる「雄大高潔健全な国民」を育成するために、「教育」こそが必要であると訴えている。

しかしながら、郷土の教育環境についての現状を分析すると、群馬県内の前橋・高崎・太田などのいくつかの都市部には、中等教育機関⁽⁴³⁾が存在するが、勢多郡東部、山田郡西部など、未だ空白地域がある。そのため、教育の機会に恵まれない

論 文

地域の青少年のために、教育の場を提供することを目的とし、学校を設立することで、「教育の機会均等」を保障しようと考えていた。こうして、浦造の教育にかける熱情に共鳴する「主唱者36名」⁽⁴⁴⁾が集まった。かれらの多くは、県会議員・郡会議員・町村長などの地方政治家や浦造の知人である小学校長など、地域の有力者であった。創立発起人の代表として、当時の勢多郡新里村長（現桐生市）の竹内忠蔵が代表設立者となった⁽⁴⁵⁾。こうして、明治33（1900）年4月10日、前年の「私立学校令」にもとづき、「共立普通学校（3年制）」という名称で、当時の古荘嘉門・群馬県知事より設立認可⁽⁴⁶⁾を得た。

ところで、「共立普通学校」の名称であるが、そこに井上浦造の教育の理想（デモクラシー）が込められている。「共立普通学校総則」第1章「本校の組織」第1条によると、「本校ノ組織ハ本校ノ目的ヲ賛スル有志ノ協同ニヨリテ成立ス」という条文⁽⁴⁷⁾になっているが、この「共立」の文字には、教育に熱意のある「有志の協同」により設立された学校を、コミュニティ（地域）で支えるという意味があったと思われるからである。そのため、「共立普通中学校設立趣意書」を作成し、その趣意に賛同した主唱者を中心として学校経営を行うという形式にしたものであろう。そこに地方政治家などの地域の有力者を主唱者に取り込む必要があった。「普通」の文字には、「デモクラシー」の精神、すなわち、「（県立）中学校」に進学できる都市部の経済的に豊かな家庭の子弟が学ぶ学校ではなく、農山村部の住民のような、教育の機会に恵まれない多くの人々が学ぶ学校（教育の機会均等の保障）にしたいとの意味合いが込められていたのであろう。

6. 新島襄と井上浦造の教育思想

浦造にとって思想的に大きな転換をもたらしたのが、キリスト教であった。前橋教会の神学生として同志社に学ぶが、キリスト教の伝道師よりも、のちに「教育」にその生涯を賭けたことは、やはり、同志社という学校を創立した教育者・新島襄

との出会いが、大きな影響を与えたものと思われる。浦造の師でもある新島襄は、「地方教育論」⁽⁴⁸⁾のなかで、

「我国ノ教育ノ如キハ中央ニ集リ、何学モ中央ニ行カネハ学問ノナキ事ニ成行キ、又中央ノ地ニ於テ受ル所ノ悪風ハ生徒ヲ腐敗セシムルニ□シ、之ヲ薰陶シ之ヲ養生スルニ勢力ノ乏シキ事アレハ…」^(『新島襄全集1』408頁)と述べており、当時の教育がすでに東京に一極集中しており、その弊害が顕著に見られることを指摘している。そこで、新島は、「真正ノ教育ヲ地方ニ布クニ如カス」と述べ、その具体策として、「地方ニ布ントスレハ、先ツ地方ノ有志輩協同一致シテ醵金ヲナシ、其任ニ当ルノ人ヲ撰ミ、上等小学卒業生ノ其ノ校ニ進ミ、高等ナル学科ヲ学ヒ、…」^(『新島襄全集1』408頁)との意見を持ち、「地方」に学校教育を広めることを説いている。さらに、

「…卒業ノ上ハ一ト通りノ教育ヲ受タル人トナリ、地方ニマイリ如何ナル役モ勤マリ、県会議員ナリ一会社ノ長ナリ、一ノ農家ノ戸主ナリ、一ト通ノ学問アル上ハ縦令無事ノ日ニハ日向ニアリ各ノ家業事ヲ預ルモ、一旦事アルトキハ地方ノ率先者トナリ、村落ノ骨トナリ、…」^(『新島襄全集1』408頁)と述べ、地方教育の果たす役割を論じている。すなわち、新島は、「地方」に学校を設立し普及させ、デモクラシー精神に立脚した教育により、多くの人材を育成することに力を尽くすべきだと主張している。

まさに、井上浦造は、新島の「地方教育論」に見られる教育思想を生かし、「共立普通学校」を設立して、群馬県地方の「中等教育」の普及・発展に努め、実践したものと思われる。そこで、『後凋先生詩文集』に所収されている「管窺録」⁽⁴⁹⁾の「制度にあらずして人なり」を読むと、浦造の教育観を知ることができる。

「教育は人を造るにあり、宗教も人を造るにあり、道徳も政治も皆然りといはねばなるまい。今日政治を改造し経済組織を変更し社会の立直しを主張する。実に結構の事である。

されど如何に法律制度を改造した所で之を運用するものは人である。人があって始めて其効果があるのである。如何に良制度があつても、人がなかつたらどうすることも出来ない…」(「管窺録」1928年、137頁)

と述べ、いかに制度改革をしても、「教育」による人づくりをしっかりとしなければ、社会は成り立たないと主張している。そして、浦造は、自身の教育観について、次のようにも主張している。

「…報酬を眼中に措かない他人の為に、同胞の為に奉仕の生活を送り犠牲の精神を以てそれを樂みとして居り、人知らずしかも意となさず、喜んで働いて行くやうな君子人があつたら、…此社会はもつと住み心地能くなるであろう、であるから制度の改廃も大切に相違ないが、より以上に人を教育する事が大切であると考へられる…」(「管窺録」1928年、138頁)

すなわち、どんなに制度上の改革をしても、肝心な人間をいかに教育するかが大切であると説いている。つまり、浦造の教育思想の根底には、社会に奉仕できるような人間を育てる「人格教育」を尊重することがあったと思われる。浦造が自ら作詞した校歌⁽⁵⁰⁾の一節に「社会奉仕の人格を研く我等の普通校」という言葉がある。「社会奉仕の人格を研く教育」こそ、普遍的な教育の理想であり、その理想を実現すべく創設した教育機関が、「共立普通学校」であった。したがって、井上浦造の教育思想は、たんなる「知育」を主とする教育ではなく、「徳育」を重視する教育であった。まさに、「共立普通学校」の教育の特色は、「人間教育」・「人格を磨く教育」を実践する学校であった。こうした「共立普通学校」での教育にたいして、同志社での先輩でもある柏木義円は、『上毛教界月報』(第340号)⁽⁵¹⁾のなかでも、

「松下村塾に於ける吉田松陰、慶應義塾に於ける福澤先生、同志社に於ける新島先生、女子大学に於ける成瀬仁蔵氏、大間々普通学校に於ける井上浦三〔造〕氏の如き中心人物たる教育家あらば…」

と述べ、日本のすぐれた教育者と並び称して、「共

立普通学校創設者・井上浦造」を高く評価していた。また、柏木は、『柏木義円日記』[大正15(1926)年10月16日]⁽⁵²⁾のなかでも、

「井上氏ノ事業ノ実ニ地方ノ事業トシテ稀ニ見ル有益ノ事業ナリト思フテ嬉シク、且ツ崇敬ノ心ヲ深クシタリ。…隠レタル本当ノ事業ナルヲ喜ブ」

と記し、井上浦造の共立普通学校での教育について賛辞していた。

7. むすび

いずれにしても、井上浦造は、明治時代早期に群馬県地方に広まった「キリスト教思想」を受容した。そして、新島襄との出会いが、キリスト教主義の学校「同志社」に学ぶきっかけとなり、そこでピューリタニズムや近代デモクラシーの精神を体得した。その結果、浦造は、「教育者」としての新島襄の志を継承すべく、「共立普通学校」を創設した。

新島襄は、明治時代の半ばに病没するが、柏木義円や住谷天来は「非戦平和の思想家」として長らく活躍した。とくに浦造は、柏木義円の『上毛教界月報』、住谷天来の『聖化』といった雑誌に小論や紀行文、時には自己の信条や時勢をうたった漢詩などを載せた。

柏木義円も、昭和3(1928)年8月20日発行、『上毛教界月報』(第357号)紙上⁽⁵³⁾で、浦造のことを次のように取り上げている。

「…私は由来我上毛地方に於ける事業にして先生の該事業に勝るものは之有間敷と相考へ居候…我井上先生に至つては更に聞達を世に求めず隠れたる教育家として終始し居るるは…」

と述べ、義円は、浦造の教育者としての姿勢を高く評価している。そして、義円は、「共立普通学校」について、

「今や五百の交友大間々町を中心として附近村落に散在し或は村長となり或は議員となり郷党の有志者となりて…百年の計は人を植ゆるに在り先生の樂地羨ましく存候…」(『上毛

論 文

『教界月報』第357号)

と述べ、浦造の創設した「共立普通学校」の果たしてきた役割を強調している。

教育者としての浦造は、とくに「地方教育」を重視した。真に国民にとって必要なのは、「文明の本質」にかかわる「雄大高潔健全な国民」を育成する「教育」こそが必要であるとして、「共立普通学校」を設立した。同校の教師には一時、盟友の住谷天来を教師として迎えた⁽⁵⁴⁾。そして、「大正・昭和」と長きにわたり、教頭格として浦造の教育を助けた博物学者・岩澤正作⁽⁵⁵⁾という個性豊かな教師とともに、約40年間の学校教育を成しとげた。ただ、当然その間、多くの困難もあった。「共立普通学校」の創立時の生徒は、わずか十数名でスタートし、日露戦争の頃には新入生が8名の時もあったという。

いずれにしても、「共立普通学校」は、群馬県地方でもいわゆる「農村地域の子弟たち」を育てるべくして設立された学校であった。同校で学んだ生徒の多くは、無名ではあるが、地域で生活する良識ある住民となった。明治時代の中期から、真の国民教育を普及させるべく孤軍奮闘した井上浦造は、まさに新島襄の教育の志を継承し、「地方教育」を推進・確立させたという点で、その功績には大なるものがあった。

最後に井上浦造の政治的関心（非戦論などについて）や昭和初期、戦時下のプロテスタント系諸教派の動向に関する見解を述べているような資料には乏しく、それらについての調査・研究は今後の課題としたい。

【注】

- (1) 日本キリスト教歴史大事典編集委員会『日本キリスト教歴史大事典』、教文館、1988年、125頁。「井上浦造」の項を参照。
- (2) 萩原俊彦『近代日本のキリスト者研究』、耕文社、2000年、305頁。
- (3) 『日本キリスト教歴史大事典』、教文館、1988年、734頁。住谷天来（1869～1944）は、群馬県群馬郡国府村（現高崎市）の農家に生まれる。慶応義塾を卒業。内村鑑三と交わり、非戦論に
- 共鳴。カーライル『英雄崇拜論』などを翻訳。群馬県内の伊勢崎、甘楽教会などの牧師となる。のちに『聖化』を発刊し、非戦・平和主義を主張。
- (4) 前掲書、293頁。柏木義円（1860～1938）は、越後国（新潟県）出身。同志社に学ぶ。安中教会にて海老名弾正から受洗。のちに安中教会牧師となる。『上毛教界月報』を発刊し、非戦論を主張する。
- (5) 『近代日本のキリスト者研究』、耕文社、2000年、「第二編Ⅰ・一大間々普通学校を創立した井上浦造」、301頁～309頁。
- (6) 井上浦造『華甲記念後凋先生詩文集』、後凋詩文集刊行会、1928年。同書は、井上浦造の創設した「共立普通学校」の同窓生たちが出版した。井上浦造著の「自叙傳」は、1～106頁に該当する。以下、「自叙傳」とのみ表記する。
- (7) 隅谷三喜男『日本プロテスタント史論』、新教出版、1983年、「群馬キリスト教会の形成過程」、15頁～37頁。
- (8) 渡瀬常吉『海老名弾正先生』、龍吟社、1938年、175頁。ここに海老名弾正の「前橋教会」（明治17年～19年）での足跡を知ることができる。
- (9) 日本基督教団前橋教会教会史編集委員会『前橋教会史110年の歩み』、朝日印刷、1996年、資料編「4受洗者・転入会者一覧」、287頁。
- (10) 萩原進『群馬県史 明治時代 教育・社会編』、高城書店、1959年、588頁。
- (11) 久保千一『柏木義円研究序説 上毛のキリスト教精神史』、日本経済評論社、1988年、「住谷天来略年譜」、288頁～290頁。
- (12) 『復刻版 聖化（上）』、不二出版、1990年所収。住谷天来編『聖化』（20号）、聖化社、昭和3（1928）年8月5日発行、「後凋先生」より。
- (13) 『前橋教会史110年の歩み』、朝日印刷、1996年、288頁、資料編「4受洗者・転入会者一覧」。
- (14) 前掲書、11頁。
- (15) 新島襄全集編集委員会『新島襄全集 8年譜編』、同朋舎出版、1992年、456頁～458頁。
- (16) 新島襄全集編集委員会『新島襄全集 5日記・紀行編』、同朋舎出版、1984年所収、「漫遊記」、363頁。

- (17) 前掲書、「漫遊記」、369頁。
- (18) 上毛新聞社編『群馬新百科事典』、藤原印刷、2008年、「高津仲次郎」484頁、「竹内鼎三」491頁、「宮口二郎」572頁、「中島祐八」722頁。
- (19) 同志社編『同志社百年史 通史編一』、日本写真印刷、1979年、130頁。
- (20) 同志社編『同志社百年史 資料編一』、日本写真印刷、1979年、676頁。
- (21) 前掲書、676頁～700頁。
- (22) 『群馬新百科事典』、藤原印刷、2008年、55頁。
- (23) 前掲書、650頁～651頁。
- (24) 『新島襄全集8年譜編』、同朋舎出版、1992年、553頁～558頁。
- (25) 群馬県立図書館蔵。井上浦造「故新島襄先生に就て」、『山田郡教育會雑誌』第60号、明治36(1903)年10月24日発行。
- (26) 本井康博『ひとりには大切 新島襄を語る(二)』、思文閣出版、2006年、97頁。
- (27) 同志社大学人文科学研究所監修『キリスト教記事総覧第2巻(Ⅱの1) 東京毎週新報・基督教新聞・東京毎週新誌・基督教世界』、日本図書センター、1996年、マイクロフィルム所収(聖学院大学図書館所蔵)を使用。
- (28) 『日本キリスト教歴史大事典』、教文館、1988年、242頁。
- (29) 前掲書、109頁。
- (30) 杉井六郎『遊行する牧者 辻密太郎の生涯』、教文館、1985年、196頁。
- (31) 『日本キリスト教歴史大事典』、教文館、1988年、1087頁。
- (32) 新治村編『新治村史料集』(第三集復刻)、朝日印刷、1987年、「須川基督教会年表」、172頁～180頁。
- (33) 沼田教会創立百周年記念事業百年史編集委員会『沼田教会百年の歩み』、日本基督教団沼田教会、1989年、287頁。
- (34) 『遊行する牧者 辻密太郎の生涯』、教文館、1985年、196頁～197頁。
- (35) 大内三郎「松村介石研究序説」、『東北大学日本文化研究報告12』、1976年、1頁～18頁。
- (36) 内村鑑三『後世の最大遺物・デンマーク国の話』、岩波文庫、1992年、「解説」、104頁～105頁。
- (37) 『日本キリスト教歴史大事典』、教文館、1988年、715頁。
- (38) 『前橋教会史110年の歩み』、朝日印刷、1996年、15頁。
- (39) 竹中正夫『ゆくてはるかに 神戸女子神学校物語』、教文館、2000年、「資料2 神戸女子神学校卒業生・会友名簿」、3頁。
- (40) 鶴沼裕子『史料による日本キリスト教史』、聖学院大学出版会、1992年、36頁。
- (41) 群馬県立大間々高等学校編『大間々高校百年史』、上毛新聞社出版局、2000年、「第二部 大間々高校の歩みー 共立普通学校の時代」、27頁～125頁、「共立普通学校」の開校から、閉校するまでの動向が記されている。
- (42) 『大間々高校百年史』、上毛新聞社出版局、2000年、563頁所収、資料①「共立普通中学校設立趣意書」より。
- (43) 群馬県教育史研究編さん委員会編『群馬県教育史 第二巻(明治編下巻)』、朝日印刷、1973年、356頁。
- (44) 『大間々高校百年史』、上毛新聞社出版局、2000年、563頁。井上浦造・高島房次郎・竹内忠蔵ら36名。
- (45) 前掲書、27頁。
- (46) 前掲書、28頁。
- (47) 前掲書、567頁。
- (48) 新島襄全集編集委員会編『新島襄全集1・教育編』、同朋舎出版、1983年、「地方教育論」、408頁～409頁。
- (49) 「管窺録」は、『華甲記念後凋先生詩文集』後凋詩文集刊行会、1928年所収、107頁～139頁に該当する。
- (50) 『大間々高校百年史』、上毛新聞社出版局、2000年、資料②「共立普通学校校歌」(大正10年・井上浦造作詞)、576頁。
- (51) 柏木義円編『上毛教界月報』(第340号)、昭和2(1927)年3月28日発行は、『上毛教界月報(復刻版)第8巻』、不二出版、1984年所収。
- (52) 飯沼二郎・片野真佐子編『柏木義円日記』、行

論文

路社、1998年、394頁。

(53) 柏木義円編『上毛教界月報』（第357号）は、『上毛教界月報（復刻版）第9巻』、不二出版、1984年所収。

(54) 『大間々高校百年史』、上毛新聞社出版局、2000年、資料③「教員姓名学歴其他」565頁。住谷天来は、「明治43年～明治44年」まで、「国・漢」を教えていた。

(55) 前掲書、資料③「教員姓名学歴其他」566頁。岩澤正作（1876～1944）は、神奈川県出身。

博物学教師として、前橋・高崎中学校教師を経て、「共立普通学校」へ着任。大正2年～昭和11年3月まで22年間勤務。

[付記] 本稿は日本ピューリタニズム学会第5回研究大会（2010. 6. 19 聖学院大学）の「自由論題A」として報告した内容に、加筆・修正を加えたものです。報告にたいして有意義なご教示をいただき御礼申し上げます。

Joseph H.Neesima and Urazou Inoue, Founder of Kyoritsu Futsuu School

Atushi Osaki

Urazou Inoue (1867-1952) was born in Maebashi-shi, Gunma-prefecture. He met Neesima when he was young and learnt in Doshisha seminary.

After graduating, he became a Christian missionary in many places in Gunma-prefecture.

But he took interest in education and founded Kyoritu Futuu school (the present high school) Omama-machi in Gunma-prefecture in 1900. He succeeded to Neesima's educational thought, and his endeavour to develop local education and devoted himself to it for about 40 years.